

第32回(令和7年度) 千葉県建築文化賞 表彰作品集



主催：  千葉県

共催：  一般社団法人 千葉県建築士会

千葉県建築文化賞について



千葉県知事 熊谷 俊人

令和7年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募を賜り、誠にありがとうございました。

本賞は、建築文化及び居住環境に対する県民の皆様の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的として平成6年度に創設されました。

第32回となる今年度は、48点もの御応募をいただきました。

その結果、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞1点、優秀賞4点及び入賞3点の合計8点を選定したところです。

受賞作品は、新築の建物から既存ストックを有効活用したもので多岐にわたり、周辺環境との調和や自然環境への配慮に優れたもの、人々が集い憩う快適な空間を創出したもの、地域の再生や交流を促す場所など、いずれも千葉の魅力を高め、地域の活性化に大きく貢献するまことに素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、今後も地域社会の中で親しまれ、本県の建築文化の向上と、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

県としましては、誰もが安心して快適に暮らすことができる住まいづくりや、歴史的文化や景観などの地域固有の資源や地域特性を生かした多くの方々に選ばれる魅力あふれるまちづくりを進めてまいりますので、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに御応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさついたします。

令和8年3月

目次

千葉県建築文化賞について	1	MICHIYA	8
第32回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	ReISEU 3 BLD.	8
仲井町の家	3	床と光の家	9
麗澤大学 校舎さつき	4	選考の基準	9
三山の看・学・医 地域ケアコンプレックス	5	第32回千葉県建築文化賞検討会議	9
Yn/h	6	千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧	10
増減の家	7	受賞作品の位置	10

第32回千葉県建築文化賞選考経過と総評

応募48点から8点を表彰



千葉県建築文化賞検討会議委員長 岡部 明子

(選考経過)

第32回千葉県建築文化賞は令和7年5月の第1回検討会議で募集要領を定め、7月上旬から9月下旬まで応募・推薦を受け付け、総数48点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

県内の建造環境の状況を鑑みると応募があってもよいように思えるが、出揃った建築物の多くがそれぞれに魅力的なものだった。応募していただいた皆さまの熱意に深く感謝したい。

10月に第2回検討会議を開催し、書類による一次選考を行った。すべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真等をもとに投票を行い、現地調査の対象とする一般建築物6点、住宅6点を選んだ。次いで11月の3日間かけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。二次選考は12月開催の第3回検討会議で、現地調査の報告を踏まえて、投票を交えながら討議を重ね、優れた建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある応募建築物などについては、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、入賞3点を表彰候補対象として決定した。

募集部門	選考経過	応募総数	現地調査 (一次選考)	受賞作品選定(二次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		24	6	0	2	1
住宅		24	6	1	2	2
合計		48	12	1	4	3

(総評)

今年度は、一部の例外を除いて比較的規模の小さい建物の応募が多く、社会状況の変化を受けてスキマ的必要性を埋める建築的試みが目立った。建築物として質の高い物的環境を創出することに貢献できているところのみならず、建築プログラムとして今後の発展性が見込める点も十分に考慮し慎重に議論した。

優秀賞の「麗澤大学 校舎さつき」は、文系の学部からなる大学だったところに工学部が新設されたのに対応して建てられた新校舎である。建設コスト高騰の影響を受けながらも、環境面、構造・構法面で新技术を積極的に取り入れ、心地よい空間を創出している。本校舎新設にともない行われたランドスケープの改変により、キャンパス内の人の流れを大きく変え、さまざまな学部の学生が思い思いに過ごす屋内外の場の創出に成功している。

同じく優秀賞の「三山の看・学・医 地域ケアコンプレックス」では、個人医院の移転新築を機に、従来の診療所機能を拡張し、2階には訪問看護ステーション、3階にはカンファレンス兼休憩室を設けている。3階は、屋上テラスに開かれた開放的な部屋で、ケアに携わる地域の人たちの集まりにも使われているという。まちのお医者さんが地域ケアのハブに発展していく姿を建築的に表現している。

入賞の「MICHIIYA」は、駅前商店街がマンションに置き換わっていくなかで、一軒の歴史ある商家を残そうという当事者の強い意志から、地域の人びとの意識が変わりうる希望を見せてくれている。

今回は、例年以上に今日の住環境のあり方について考えさせられる住宅が多かった。

最優秀賞の「仲井町の家」は、母屋と離れて構成された設計者の自邸である。ごく普通の規模の宅地の区画だが、南に10mほどの崖下に公園が広がっていることをうまく活かしている。北側道路に面した小さな離れは、現在事務所として使われているが、街に開いた集いの場になっていきそうな期待をもたせる。一般に、より高い環境性能を求められるようになり、窓の少なく外と絶縁した住宅が増える傾向にあるなか、外に開いて風を通し、もっとも気持ちいい季節を満喫できる住宅を実現させている。細部の端々まで施工の美しさが行き届いている。

優秀賞の「増減の家」も設計者の自邸だが、ZEHに適合しながら、開口部を大きくとり半屋外空間と一体となった居間での生活が、手の届くコストで不可能ではないことを示している。ゆるやかなマウンドで神社の参道と隔てつつつなげることに成功している。「Yn/h」は、先祖が植えた杉の木50本ほどを構造材から仕上げ材までに無駄なく使い切っている。国産木材を建材として見直し産業化する潮流にあって、伐採、運搬、乾燥、製材、そして家になるまで地域で当たり前にあったしくみが消えていくことへの静かな警鐘である。

以上3つの住宅には、三者三様の環境への配慮が伺えた。自然環境の循環から切り離して負荷を低減することなのか、それとも逃れることのできない循環に人間のつくった建築を埋め込み直すことなのだろうか。

入賞の「ReISEU 3 BLD.」は、全国各地で持て余している築50年超のRC壁式共同住宅の改修で、耐震性を上げるために床スラブの一部を解体し出現したワイルドな空間で新たな入居者を招く試みである。「床と光の家」は、各階の床や居室の概念を一旦解いて一体的な空間に再構築することに挑んでいる。

一般建築物の部

住宅の部